

大魔王作戦 (Operation Chase, 1971)
ポール・アンダーソン (読者久志訳)
早川書房 (文庫) (1/1) 1971年・440頁

大魔王作戦



「大魔王作戦」という題名が、かつてはドラマ・マガジン誌に掲載されたのは、今を去ること十六年の昔になる。その頃の原稿発表は、きみに十一年前に遡るのだから (通算二十七年間)、五〇年代のSF、がどれだけ過去のものになったのか、わかろうというものだ。それだけの「歴史」を持つ映画傑作 (五〇年代物三篇) に、十年後の中途 (六九年発表) を加え、長篇に書き直したのが本書なのである。書き直したといっても、つなぎの部分を加えただけなので、基本的には五〇年代物の雰囲気をもっと残している。

もし産業革命のかわりに魔法革命が起っていたら——世界は科学のかわりに魔法によって支配されているだろう。魔法はなく、マ

ーエルその大がかり、ガッリン車はなく空飛ぶ車のキ・デラックが舞う。そう、ユーモア風の設定なのだ。最新に世界の法則が変わってしまっているわけではない。あとがきにも書かれているけれど、ランドール・ギャレットのダリー・舞とか素材員にも、似た形の設定はある。ただ、やはりダリー・舞はヒステリーといふべきだろう。舞臺にその世界があるだけで、あまり「意味」を説明しようとはしないからだ。それに対して、本書やピアズ・アンソニーのダンス・シリーズが、科学的に世界の有様を説明する点は、良くと悪くもSFの典型的な理屈の付け方だと考えてみたい。

本書は主に四つのエピソードから成っている。アメリカに侵入したイスラム軍の魔術を心理作戦でやっつける話。出現した火動物を捕縛させる話。空魔に取りつかれそうになる話。最後が取り換えずでさらわれた娘を追って、魔域に降りていく話と、計四つである。

主人公のステイヴ・グレンは魔術、ヒロインのダリア・ニアは、使い魔の魔法スワーム・グリアを持つ魔女である。本書の場合、あまりキーマン・ドラマ的な部分はないのだが、こういう組み合わせも面白い (使い魔の猫と魔女は、映画にもありました。奥蔵は魔女は、タイバーの「魔」という名の魔女たち。以来の伝説。世界が吸血鬼で奥蔵が猫女となると、ときめき「ナイト」ですね)。

最初の二つのエピソードは、五〇年代風の

荒唐無稽さで書かれている。ヒロインの魔術で、危機が回避されるというパターンだ。そもそも大戦小説によると、アンダーソンはアメリカのSFの本音直なのである。アンダーソンを基準にすれば、たいていの作家を測っていけるという意味だ。特にその主題は、アメリカ人のアメリカ・イデオロギイを反映している。この主題、時と場合によって、物語を面白くしたりつまらなくしたりするわけだ。外国人の立場からアメリカのSFを語る上で、たしかに有効なメタ・イデオロギイではある。本書の前半、三つの目々らいいまでは、ますますパタニス角くできた方ではないだろう。

けれども、アンダーソンの考え方は、最後のエピソードで極めて徹底的な短所を見せてしまう。つまり、長篇の反例を叫ぶグノーシス主義者・魔術をさらった魔域の手先・地獄の魔王・ストラー。これは、ある意味で思惑停止に近い。たぐみに宗教的論争に置きかえられてはいるが、六〇年代末期の時代状況を、いくらか反映しているようにも見える。要するに、ナマ臭いのだ。それだけ六〇年代は、五〇年代のマジにのさまり切らない部分があったと見るべきだろう。もっとも、八〇年代に入って、ディックらが新グノーシス主義に位置付けられたりするのだから、時代というやつが作品に及ぼす影響は、測りようがない。まあしかし、最後の一つも読めぬさしなければ、軽く笑しめる作品であることは間違いないのだ。